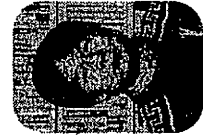


(資料④)

# I 自然と人間が調和した 持続可能な未来社会への展望

◆ESD—J運営委員長／立教大学社会学部教授  
阿部 治



## 一、「持続可能な開発のための教育の十年」とは

「持続可能な開発のための教育の十年」とは、持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development) (以下「ESD」という) への取り組みを各国が積極的に行ない、またそのための国際協力を推進するよう国連を通して各国政府に働きかけようというもので、二〇〇二年十二月の第五七回国連総会決議にもとづき、二〇〇五年一月からスタートする。

この取り組みは、二〇〇二年八月開催のヨハネスブルグサミットで小泉首相が、日本政府と、NGO組織である「ヨハネスブルグサミット提言フォーラム」との

共同提案のかたちで、同サミットの実施文書に盛り込むよう提案して承認され、その後、国連総会にかけられ、決議されたものである。

### 1 「持続可能な社会」の 実現をめざすESD

ESDは、「持続可能な社会」の実現をめざす教育の運動 (生涯教育や子どもたちの教育・学習) である。

なぜ、持続可能な社会の実現が重要な課題なのか。それは、地域から地球規模にいたる環境問題、資源・エネルギー問

題、食料・人口問題、開発と貧困、人権や平和、核の問題など、二十一世紀の主要な問題に目をやれば、自ずから明らかであろう。

たとえば環境の問題でいえば、異常気象、気候変動、温暖化がはじまっている。食料と人口も問題で、現在、地球の人口は六三億人、毎年約九〇〇〇万人が増えている。二〇五〇年には九〇億人になると予想されているが、食料が増える見通しはない。あるいはまた水の問題は、二十一世紀の大問題になるといわれているが、いま世界の人口の五分之一、約二二億人の人びとが安全な水を飲めず、多くの人びとが水を買わなければならない状況が生まれている。水は食料の生産にも大きな影響を与えることになる。

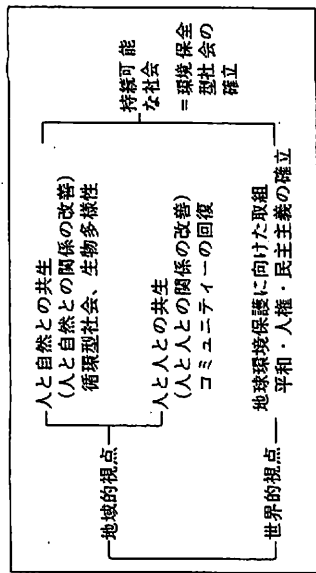


図1 持続可能な社会確立の視点

その際、注意しなければならないのは、これらの問題がそれぞれ個別的に存在するのではなく、相互に深く連関しあっており、グローバリズムの進展のなかで、ますます深刻化していることである。たとえば環境が悪化すれば環境難民が発生し、平和が脅かされても難民が生まれ、そこに貧困や人権の問題が引き起こされる。

また現在、先進国の人びとは大量生産・大量消費・大量廃棄に支えられた、物質的に豊かな生活を享受しているが、貧困問題をかかえる途上国の人びとはこれらの先進国の生活に近づこうとしている。しかし、物質的な豊かさを幸福の指標として全世界の人びとがこれを追求すれば、地球環境は一層悪化し、近未来のうちに深刻な破綻が訪れるだろう。

このような破綻を回避するうえで、持続可能な開発をすすめる、豊かさの新しい指標を創造的に確立していくことによって、自然と人間が調和し、途上国の人びとも先進国の人びとも豊かさを享受できる「持続可能な社会」を世界的規模で実現することは、緊急の課題なのである。

ここでは、つぎの三つの公正という視点が重要になる。

第一の公正は「世代内の公正」で、具体的には南北問題などの経済的不平等の問題、貧困の問題である。国連開発計画 (一九九二年) によれば、世界の人口を二〇%ずつ区切っていくと、二〇%の最富裕層が世界の富の八二・七%を占めて

おり、最貧層二〇%の富はわずか一・四%にすぎない。しかも両者の所得比は年々拡大している。

第二の公正は「世代間の公正」、すなわち次世代以降の人びとに豊かな自然や資源をどう引き継いでいくかといった視点である。そこには原子力発電の放射性廃棄物のような処理がやっかいなマイナスの資産を次世代に残していくことについて、どう考えるかという問題も含まれる。

これらの第一、第二の公正は人と人の関係の問題であるのに対して、第三の公正は、自然と人間の関係における公正の視点、環境倫理の問題である。そこでは生物の多様性だけでなく、水や空気、地形、景観など、無生物も含む、自然の事物すべてが対象になる。

たとえば生物の多様性の問題で考えてみると、生物の多様性は遺伝子の多様性、種の多様性、生態系の多様性の三層から成るが、人間の生活はこれらの生物の多様性に依存しているのである。そこで、人間の活動による自然の破壊、生物種の

減少は、次世代が生きるための選択肢、生存の基盤を奪うことになる。第三の自然と人間の関係の公正の問題は、第二に述べた世代間の公正の問題と直接に関連している。

これら三つの公正を実現しない限り、持続可能な社会は展望できない。

持続可能な社会を実現するには、このような三つの公正の原則に即りつつ、自らの生活の場で、食料や各種生産、エネルギーなどを循環的システムのなかに組み込み、循環型社会を形成して生物的多様性も確保していくことや、人と人の対話を取り戻し、近代化のなかで弱められてきたコミュニティーを再興することが求められる。循環型社会の形成、生物的多様性の確保、コミュニティーの再興―これら課題をそれぞれの地域で具体化し、「持続可能な地域づくり」に取り組むことが、持続可能な社会の実現には必要なのである。したがってその取り組みは、地域づくりの具体的実践のなかでの地域の人びと自身の学習（生涯教育）と、そのような地域実践の場における、

次代を担う子どもたちの教育・学習を、その内に含んでいる。

また、その取り組みは、先進国と途上国で違ってくるであろうし、地域の人的資源やさまざまな自然環境、社会環境、歴史、文化、宗教などによって異なってくるだろう。

そういう意味で、ESDは多様性をその内に含んだ概念で、個性をもったそれぞれの地域を基盤とし、その多様性を保証しつつ、いま述べた三つの公正や平和という世界的課題につき抜ける運動的・創造的概念なのである。